

ロンサールにおけるカロンとパルカ
— m'envoie (m'envoyez) en la barque de... —

延 味 能 都

岡山大学ヨーロッパ言語文化研究
第21号 別刷
2002年3月

ロンサールにおけるカロンとバルカ

— m'envoie (m'envoyez) en la barque de... —

延 味 能 都

序

ロンサールの「オード集第4の書」の語彙分類が大方終了した⁽¹⁾。細かい部分の訂正等がまだ終わっていないため、全面的にこのデータを使用することはまだできないのだが、同一表現を検索する程度の使用には耐え得るものとなった。そこで、このデータを利用して『オード集第1の書』から『オード集第4の書』までの4詩集を対象に同一表現の検索を行った。その結果、m'envoie en la barque de perdurable exil と m'envoyez en la barque de l'avare nautonnier の二つの表現が検索に引っかかってきた。

動詞 envoyer の主語はいずれもバルカである⁽²⁾。また、la barque de perdurable exil も la barque de l'avare nautonnier もこれは三途の川の渡し守カロンの小舟である。単語としての一致は頭から6語までだが、最後の表現が異なるとはいえ両方ともカロンの小舟を示している点で見かけ以上に一致の度合いは大きい。同一表現というよりもある種の表現形式、あるいは表現の枠組みを拾ってきたようである。

さて、動詞の主語となっているバルカは3人姉妹の女神であり、ローマ人においては、やはり運命を司るとされるギリシア女神のモイラと同一視されている。3人は運命を割り当てる〈配給者〉ラケシス、運命の糸を紡ぐ〈紡ぎ手〉クロトー、運命の糸を断つ〈変えるべからざる女〉アトロポスである。3人のうち、中でもアトロポスは糸を断つという役目から死に強く関わっており、ロンサールにおいてもカロン同様に死と結びつけられる場合が多い。

一方、カロンは冥府の河アーケロン川の渡し守である⁽³⁾。一般に長髯で、汚れたみすばらしい衣服を着ており、吝嗇、強欲、頑固な老人として想像されている。死者（の魂）はこのカロンの舟で河を渡ることにより戻ることのできない死の世界へ入るとされており、カロンはその職業柄、死と結びつけられる場合が多く、ロンサールにおいても例外ではない。

検索で得た上記の2例のうち、一つはロンサールの『オード集第2の書』オード17番である。そこではバルカとカロンの小舟が共に出現する場面がある。そしてこの部分についてはローモニエ P. Laumonier によってホラティウス Horace との関連が指摘されている。するとこのバルカとカロンの両者の同時出現には Horace が背景にいらしい、ということにな

るのだが、実は、ロンサールでの出現例はバルカのみ、あるいはカロン（の小舟）のみ、という場合がほとんどである。バルカとカロンはどちらも死を象徴し得るのだから、両者が一つの同じ場面で使用されたとしてもごく当たり前のように思われるのだが、つまり、同様な例がもっとあっても不思議はないように思えるのだが、その数は意外に少ない。しかも Horace との関連が明らかになっているのは上記の一例だけで、他の例については Horace との関連は指摘されていない。また、デュ・ベレ Du Bellay にも同様な表現が存在していること、ロンサールと Du Bellay での同様な表現の使用時期が特定の期間に集中していることも調べている過程で明らかになった。本稿では、こうした背景をふまえながら、バルカとカロンに関して同じような枠組みで展開される表現形式を中心に考察を行う。

1.

まず、カロン（の舟）とバルカが同時に出現する例のうち、ローモニエによって Horace との関連が指摘されている例、『オード集第2の書』オード17番から見て行こうと思う。タイトルは LES LOUANGES DE VANDOMOIS, A JULIEN PECCATE. となっており、内容はそのタイトルが示すように、ロンサールが自分の故郷を讃えるものである。最後は、その土地ヴァンドーモワで死にたいものだ、と締めくくられている。この中に次のような一節がある。

Là je veil que la Parque
Tranche mon fatal fil,
Et m'envoie en la barque
De perdurable exil.

(Laum. t. 1, p. 225, v. 65-68.)

この一節ではバルカは単数扱いであるため、「運命」と理解することもできるが、むしろ、運命の糸を切るという役割からアトロポスの人格を強く反映しており、死の意味合いが強い。バルカが糸を切るというこの行為だけで死をそこに読みとることが可能だからだ。一方、永遠の追放の小舟 la barque de perdurable exil は、カロンの名前は出ていないが、明らかに冥界の渡し守カロンの小舟である。カロンの小舟に乗り込むこと自体にも死を読みとことはできるが、ここではむしろ主体はバルカである。バルカが運命の糸を切り、バルカが死者（の魂）をカロンの小舟に渡すのであり、カロンにはバルカと同じ強い力はない。カロンはどちらかといえば脇役である。だがバルカからカロン（の小舟）への流れが連続して一つの表現形式となって、回りくどい言い方ではあるが、「死ぬこと」の文学的表現となっている。

したがって、この一節は「(これまで讃えてきた素晴らしいヴァンドーモワの地で) 私は死にたいものだ」という展開になっている。

それでは次にもう一つの出現例である「オード集第4の書」オード16番を検討してみよう⁽⁴⁾。このオードは曙女神オーロール、ケバロス、ケバロスの妻のプロクリスを中心にした神話をもとにしている。ローモニエによればこの詩の基本となるラテン詩人はオウィディウス Ovide であり、その源となった作品は『変身物語』 *Metamorphoses*、『愛の技法』 *Ars amatoria*、『恋人達』 *Amores* などであるされている。もちろんロンサールは Ovide の神話の展開をそのまま取り上げたわけではなく、そこにはロンサール独自の工夫がいくつか施されている。しかし基本となったのは Ovide の『変身物語』の第7巻、「ケバロスとプロクリス」と題される章で、そこで語られる神話は次のようなものである。

相思相愛の夫婦となったケバロスとプロクリスは幸せに暮らしていたが、婚儀を終えて2ヶ月目、狩の準備をしているケバロスを見つけた曙女神オーロールがケバロスを引きさらってゆく。しかしいつまでもプロクリスへの想いを口にするケバロスに腹を立てた女神はケバロスプロクリスの元へ返すことにする。ケバロスは帰宅の途中で女神の言葉から妻の不貞への疑念を生じ、妻を試し、妻のプロクリスの怒りを買う。その後仲直りをして再び仲むつまじく暮らし、ケバロスは妻から決して獲物を逃すことのない犬と決して獲物はずさない槍をもらう。そしてケバロスはこの槍を持って狩にでかけるのが常となったが、その際、ケバロスはアウラ（そよ風）に呼びかけるのが常であった。そしてこのアウラ（そよ風）への呼びかけがプロクリスの疑惑を招き、プロクリスは槍を持つケバロスの近くに潜む。かすかな動きにケバロスの投げた槍はプロクリスの胸に突き刺さり、プロクリスはケバロスの手の中で最後の言葉を口にしながら息を引き取る。

ローモニエは次のような相違点を指摘している。Ovide ではケバロスはプロクリスが生きている間にさらわれてしまう。しかしロンサールでは、ケバロスがさらわれるのはプロクリスの死んだ後である⁽⁵⁾。さらに誤って槍に刺されたプロクリスが息を引き取る場面で語るのは、Ovide ではプロクリスだが、ロンサールではケバロスが語ることになっている⁽⁶⁾。このような違いがあるにしても、基本的な展開の大部分は Ovide に負っている。『オード集第4の書』オード16番では以下のようにになっている。

[...]

Elle (= Aurore) vit dans un bocage⁽⁷⁾

Cephale parmi les fleurs,

Faire un large marescage

De la pluie de ses pleurs.

O ciel, disoit-il, ô parque
 Avancez mon jour dernier,
 Et m'envoiez en la barque
 De l'avare nautonnier,
 Je hai de vivre l'envie,
 Ce monde m'est odieux :
 Puis que j'ai tué ma vie
 A quoi me gardent les Dieux?

O Javelot execrable
 Tu m'es témoin aujourd'hui,
 Qu'on ne voit rien de durable
 En ce monde que l'ennui.
 Ainsi disant il se pasme
 Sur le cors qui trépassoit,
 Et les reliques de l'ame
 De ses levres amassoit.

(Laum. t. 2, p. 139, v. 117-136.)

女神オーロールは花の中で涙に暮れるケパロスを見る。ケパロスは誤って自分の妻であるプロクリスを槍で殺してしまい悲嘆に暮れて嘆いている。いわゆる事後の場面である。引用の初めの部分、ケパロスが流す大量の涙の描写も Ovide からとされ、引用の最後の部分、ケパロスが息を引き取ろうとしているプロクリスの上に身を傾け、その唇から逃れようとする魂のなごりを集めるという描写もまた Ovide やウェルギリウス Virgile から発想を得たとされている⁽⁴⁾。そしてケパロスの独白の部分は先に述べたように、ロンサルが Ovide と異なる工夫をした部分である。先の『オード集第2の書』オード17番の一節とほぼ等しい部分はこの独白の中にある。

この部分にはローモニエによる源の指摘は無い。さらにここではバルカは運命の糸を切るわけでもない。問題の部分の前後は Ovide で固められている。しかし動詞 *envoyer* の主語はバルカで同じである。さらに「我が死を早めてくれ」*Avancez mon jour dernier* に認められるようにバルカは生死の定めを司り、特に死を担うアトロポスの性格を反映した存在であることは先の例と変わりがない。*la barque de l'avare nautonnier* は先の『オード集第2の書』オード17番と同じように渡し守カロンの小舟を示している。先の例と違って *l'avare*

nautonnier の語が入っているのでカロンの小舟を指していることは一目瞭然である。そして死者（の魂）をカロン（の小舟）へ渡すのがバルカである点も同じである。以上が検索の網にかかってきた2つの同一表現である。

ところで、先に示した『オード集第2の書』オード17番には Horace や Virgile の影響、特に Horace の影響が強く出ていとされる。問題としている一節もローモニエによって Horace の以下の部分を源としていとされている。

huc vina et unguenta et nimum brevis
flores amoenae ferre iube rosae,
dum res et aetas et sororum
fila trium patiuntur atra.
[...]
omnes eodem cogimur, omnium
versatur urna serius ocuis
sors exitura et nos in aeternum
exilium impositura cumbae.

(Horace, *Carmina*, Liv. 2, III, v. 13-16 ; v. 25-28.)⁽⁹⁾

まず目に付くのは nos in aeternum exilium impositura cubae と la barque de perdurable exil の一致である。このくだりはロンサールの一行とほぼ模倣と言って良いほどに一致する。さらに前には三柱の姉妹達の黒い糸、つまりバルカ達の運命の糸への言及がある。文脈からしてこの複数のバルカ達は死を司るアトロポスの性格を強く反映している。sors（籤、運命）も urna（壺）も死の公平性を象徴していることが容易に理解できる。ところが、肝心の流れ、バルカが死者（の魂）をカロン（の小舟）に渡すという行為がここにはない。

では、なぜローモニエは『オード集第2の書』オード17番に Horace との関連を指摘したのか。そしてなぜ『オード集第4の書』オード16番の一節には Horace との関連を指摘しなかったのか。『オード集第2の書』オード17番と『オード集第4の書』オード16番の二つの引用部分で異なるのは、まず、後者には動詞 trancher が欠けており、バルカが糸を切る行為が無いことである。ところが、バルカが糸を切る場面はローモニエによって源であると指摘された Horace にも無い。したがってこれは『オード集第2の書』オード17番に注が付される理由にもならないし、『オード集第4の書』オード16番に Horace との関連を示す注釈が付かない理由にもならない。残るのはカロンの小舟を示す表現である。『オード集第4の書』オー

16番では la barque de l'avare nautonnier だが、『オード集第2の書』オード17番では la barque de perdurable exil となっている。l'avare nautonnier はカロンを示すとすぐに理解できる平凡な表現だが、la barque de perdurable exil にはカロンを示す言葉は無い。しかしこの表現は Horace と同じようにカロンの小舟を示すことが明らかで、なおかつ、あまりに Horace の表現に近い。その意味ではカロンの小舟を示す特殊な表現法である。つまり、ローモニエが Horace との関連を指摘した時のキーワードは perdurable exil と aeternum exilium であり、ローモニエが目にしたのはどうも永遠の追放の小舟 la barque de perdurable exil と nos in aeternum exilium impositura cubae の部分の一致のように思える。この意味では、ロンサルがこの Horace の一節を参照しただろうというローモニエの指摘も十分に納得できるのである⁽¹⁰⁾。ところがこれは我々の興味を引いた点とは異なるのだ。

では、我々はどこに興味を引かれたのか。それは、バルカが人の運命、死を司り、バルカが死者(の魂)をカロンの舟に送り込むという、いわばバルカとカロンの二段構えの枠組みに興味を引かれたのである。バルカもカロンもそれぞれがすでに単独で十分に死を表現出来ると思われるのだが、ここではその両方が使用され、バルカが運命の糸を切り、カロンに引き渡すという二段階構えの死の描写が、死という一つの出来事を表現している。『オード集第2の書』オード17番と『オード集第4の書』オード16番の二つにも同じ枠組みが認められる。当初はローモニエの注がこの観点を含んで付されたものと考えていたが、それならば例にあげた二つの両方に注が付されていて不思議はない。ところがそうはなっていなかったのである。

では、この表現は Horace とは全く関係の無いものなのだろうか。Horace の *Carmina* にはバルカがカロンへ死者(の魂)を引き渡すというくだりは見つけることが出来なかった⁽¹¹⁾。しかしもしこの枠組みが、ロンサルが Horace からではないにしても、どこかから受け継いだものだとするならば、他にも同様な表現がロンサルに存在する可能性がある。そしてその表現は源との関連が指摘されないままに埋もれていることになる。こうした枠組みに沿った表現はロンサルでは他には無いのだろうか。実は、他にもあった。

2. カロンとバルカ

まず、順序から言えばその他の出現例を示すべきだろう。しかし、出し惜しみをするわけではないが、話を変えてカロンとバルカについて見ておかねばならない。ロンサルの作品に出てくるカロンとバルカの出現例全ての中で、問題としているような使用法がどのように位置付けられているのかを押さえておきたいからである。

最初はカロンだが、カロンが冥界の三途の川の渡し守という役割を持つ以上、カロンとその小舟が死と結びつくのはむしろ当然と考えてよいだろう。ロンサルにおいてもカロンは

常に死と隣接したイメージで捉えられている。しかし用例を調べてみると、カロンとその小舟が表すものは常に同じというわけではない。ロンサールの全作品の中でカロンの出現数は28だが、その時に注目、あるいは強調されるカロンの属性は文脈によって異なっている。

たとえば、カロンの船は旅客を逆に渡すことはない。人間のどのような願いもカロンの舟を後戻りさせることは出来ない。どれほどの金を積んでも死を逃れることは出来ないという形でカロンは死の不可逆性・不可侵性を象徴する⁽¹²⁾。

また、ロンサールはカロンに厳格で融通の利かない性格を与えて死の激しさを強調する場合もあるが、これは死の厳格な公平性と強く結びついている。ロンサールが手本としたとされる Horace にも「籤」や「(運勢の) 壺」の形で出てきているように、死は身分の低い者にも高い者にも公平に変わることなく訪れる。死の公平性は旅客の貴賤を問わないカロン（の小舟）が象徴する死の特徴の一つである⁽¹³⁾。

もちろんカロンが人間的な側面を持つこともある。Prosopopée de Beaumont levrier du Roy, & de Charon. の中ではこの老神はひどく人間的である⁽¹⁴⁾。この詩編はカロンをメインに据えた作品であるため、カロンも言葉話し、人間的な性格を備えている。死して冥界へ降りた Beaumont は屈強な男である。それを見たカロンは次のように問う。

Cha : Qui t'a nourry? qui es tu? D'où viens tu?

Quelle contrée au monde t'a vestu

D'un si beau corps, qui de force surpasse

Tes comagnons qu'en ma barque je passe?

(Laum. t. 14, p. 115, v. 9-12)

カロンはヘーラクレースが生きながら冥界に降りてきた時、無理強いされて河を渡した苦い経験がある。その罪によってカロンは一年間鎖に繋がれることとなった。それが再度繰り返されるのではないかという恐れがカロンにはある。ただ、神話を利用したとはいえ、このようにカロンが言葉を述べたり、カロンの内面に踏み込んだりした用例は非常に少ない。もともとカロンは冥界でも特に中心的な人物というわけではなく、いくつかの場面ではカロンは単に冥界を象徴する事物の一つでしかない⁽¹⁵⁾。

こうしたいくつかの使われ方の中で、カロンの使われ方として最も多いのはやはり死の象徴としてのカロンである⁽¹⁶⁾。

Il fut quatorze ans Roy, & en l'an de son age

Vingt & quatre il paya de Caron le naulage.

14年間王位につき、24歳でシャルル9世がカロンの船賃を払ったという時、カロンは完全に死を意味している。これほどはっきりとした例ばかりではないが、カロンはバルカと連携せずとも単独で死を象徴し得るのである。また、常にカロンの名が出てくるとは限らない。カロンの小舟を表すものとしては *bateau*, *nacelle*, *barque* などがあるが、特に *barque* が多くカロンの小舟を表す用語として使用される。この *barque* の出てくる場面は全部で36あるが、その中で12例がカロンの舟として出現する¹⁷⁾。カロンの名前が無くとも小舟だけによってカロン(の小舟)を、あるいは死を意味することはできる。したがって、たとえカロン(の小舟)がバルカと組み合わせて使用されたとしても、「バルカが死者(の魂)をカロンに渡す」という描写が自動的に生じる訳ではない。バルカとカロンの連携という事柄そのものに意味を置くことを詩人が意図しない限りこうした展開が生じる可能性は低いのである。

次にバルカについて述べておこう。バルカはギリシア神のモイラと同一視されており、その属性はすべてモイラと同一である。バルカ達は、運命を割り当てる女、運命の糸を紡ぐ女、運命の糸を断つ女の3人姉妹である。

単なる三途の川の渡し守に過ぎないカロンに比べれば、運命という大きな役割を担っているだけに出現回数も多く、その用いられ方もカロンより複雑である。ところが、たとえば *soeurs* という複数形の使用のみでそれがバルカ達を示しているという場合もあるが、これはそれほど多くない。さらに *trois soeurs* という出方もあるが、これも少ない。*trois* とついたら多くは *trois Parques* となるからである。また、バルカは3人いて各々の役割が決まっている。したがって3者3様の出方があっても不思議はないのだが単独で固有名詞を伴って使用されている例はラケシス1例、クロートー4例、アトロポス6例となっており、これも少ない。したがって、語 *Parque* (s) と上記のそれほど多くない出現例を調べることによってバルカの使われ方のほとんどを網羅することができる。ロンサールの作品内でのバルカ = *Parque* (s) の出現数は89である。

バルカは単数と複数の両方に使用され得るが、ロンサールの場合は単数使用が圧倒的に多い。バルカの出現例89例の内、複数で使用されたのは19例しかなく、残りの70例は単数使用である。バルカのそれぞれの固有名詞が出てくる場合は個々の女神の人格が反映されと考えて良いだろうが、複数の場合にはそれは難しい。漠然とした「運命」として受け止めざるを得ないものも多い。また、外見上は「ひ」「紡錘」などをもっていても役割としては「鉄」をもつアトロポスの役割であったりして3人の人格が微妙に融合している場合もある。しかし多くの場合は特定の女神の性格を読みとることができる。人が生まれた時に運命を与えるバルカ達は、バルカ達の一人ラケシスの人格を反映していると読みとることは出来るのであ

る⁽¹⁸⁾。また、運命が糸のように網のように紡がれるというとならえ方はクロトーの人格を反映し、切られる糸、容赦なく万人に訪れる死、糸切り鉈を持つバルカ達はアトロポスの人格を反映しているとならえることは出来る。複数で使用されるバルカ達をこのようにして見てゆくと3人の女神の性格の反映の出方にはそれほど大きな差は無い⁽¹⁹⁾。

ところがバルカが単数で現れてくる場合にはかなり状況が変わる。もちろん3人の女神の性格が融合している場合が少なくないため微妙な点が残るのだが、それ以上に死を司るアトロポスの人格を反映している場合が圧倒的に多くなっている⁽²⁰⁾。

バルカの出現数は89、カロンの出現数は28、barqueの出現数は36だが、バルカもカロンも死の象徴としての現れ方が最も多く、barqueもカロンの小舟として現れる場合が約3分の1を占めている。ところが、実はこの3者がダイレクトに共出現する場所は1カ所もなく、バルカとカロンに関して1カ所あるのみである⁽²¹⁾。しかし、カロンの小舟はカロンの渡し守としての必須アイテムであるから、カロンの小舟 = カロンと考えることができる。そこでカロンの小舟とバルカの組み合わせを考慮するとさらに4カ所でバルカとカロン（の小舟）は共出現をする。したがってカロン（の小舟）とバルカの出現場所が一致するのは5例である。バルカとカロン（の小舟）が共出現するケースはロンサールの全作品の中でこの5ケースしかない。

すでに2例を検討したが、バルカもカロンも単独で死を表現し得ること、共出現が非常に少ないにしても、バルカが死者（の魂）をカロンへ渡すという形式のほぼ完全な一致、の2点を考えると、これが偶然に生じた結果と考えるのはやはり不自然なように感じるのである。そこにはバルカが死者（の魂）をカロンへ渡すという形式を成立させようとする作者の意図的な行為があるように思うのである。これは、カロンとバルカが同時に現れる展開が、何らかの源となる表現を引きずっているのではないかと考える理由の一つでもある。

3. バルカとカロンの共出現、残りの3例

すでに2例を見ているので、これから残りの3例を順次見てゆこうと思う。

ロンサールには1550年にアンリII世とイギリスのエドワードVI世によって交わされた平和条約を讃えたオード *Ode de la paix par Pierre de Ronsard Vandomois, Au Roi.* があるが、引用するのはその一節である。この詩の内部形式は *Strophe*, *Antistrophe*, *Epode* の三部形式が繰り返される典型的なピングロス風オードである。内容としては、擬人化された女神 *Paix*、トロイの落城、ヘクトールの息子とされるフランシオン（フランク）のライン河畔への植民などが語られている。その中で、フランシオンは一つの墓に行きあたるのだが、その墓からはヘクトールの亡霊の声が聞こえ、フランシオンに語る。

Deus siecles apres que la Parque
 T'aura mis dans l'avare barque
 Pour aborder aus champs heureux,
 Une grand peuplade Troienne
 Laissera ta ville ancienne
 Dessous Iurois le valeureus.

(Laum. t. 3, p. 18, v. 219-224.)

「バルカが食欲なる小舟にお前（フランシオン）を乗せて200年後」 とはフランシオンの死後200年後を意味している。ここでもバルカとカロンの小舟が（カロンの名前こそ出ていないが）共に示されている。そして何よりもバルカがカロンの小舟に死者（の魂）を渡す部分があり、前述の例と同じように、二段階構えで死を示している。この例を含む詩編は主に Ovide に源を得ているとされており、Horace との関連はもちろん指摘されていない。

以下は HARANGUE QUE FIT MONSIEIGNEUR LE DUC DE GUISE... の一節である⁽²²⁾。François de Guise はカール5世と対峙して Metz を守り切ったが、その彼は1552年12月7日に敵の攻撃があると確信したと言われている。その時彼が指揮を鼓舞するために兵士達に行った演説という設定である。この中で、背を向けて逃げるのがいかに恥ずべき行為かを挙げた部分があり、その中にバルカとカロンの小舟が現れる。

Ah, quelle honte c'est quand parmi la poudriere
 On voit quelque jene homme occis par le derriere,
 Aiant le dôs beant d'ulceres aparans :
 Celui vraiment honnit ses fils. & ses parens,
 Longue fable du peuple, et la cruelle Parque
 Passe son nom & lui dans une même barque.

(Laum. t. 5, p. 212, v. 179-184.)

背を向けて逃げるような者は息子や親を辱め、その不名誉は長い間人の噂となり、バルカはその名もその者自身をも同じ舟に乗せるという。前後の文脈から見てもここは文字通りの舟ではない。カロンの小舟である。不名誉な死を遂げた者は肉体的にも死に、その名前も榮譽を失うという点で社会的にも死ぬのである。この部分でも死者（の魂）はバルカからカロン（の小舟）に引き渡される形となっており、まさしくバルカとカロン（の小舟）が一体となって死、それも肉体と名誉の二重の死を構成する形となっている。

最後の例は EPITAPHE de feu Mons^r de l'Aubespine. である。ローモニエ版では Pièces diverses attribuées à Ronsard. の中に収められており、ブランシュマン Blanchemain によって出版された、という素っ気ない注が付いている⁽²²⁾。この Monsieur de l'Aubespine という人物は国務卿 Secrétaire d'État の息子で seigneur d'Hauterive et baron de Chateuneuf の称号をもつ Claude de l'Aubespine のことである。この人物は16歳という若さで父と同様に国務卿に任命されながら、1570年の9月11日に26歳の若さで他界している。この詩編はこの人物へ宛てた墓碑銘になるのだが、ここでバルカとカロンが共に出現している。

Tout ce que France avoit de beau,
 Tout cela que pouvoit Nature,
 Repose en ceste sepulture.
 Marbre n'y soit pour couverture,
 Mais bien qu'on luy face ung tombeau
 De roses dont fleur ne dure
 Qu'ung moys ou deux au temps nouveau,
 Semblables à ce jouvenceau
 A qui la Parcque, hélas trop dure,
 N'a presté que vingt ans l'usure
 De la vie, quand le bateau
 De Caron qui des biens n'a cure
 De stix luy fist traverser l'eau,
 Entournant d'une nuict obscure
 Son corps pareil au renouveau.

(Laum. t. 18, p. 421, v. 1-15.)

直訳すればカロンが彼にステュックス河を渡らせたとき⁽²³⁾、バルカはまだ彼にその生涯を20年しか使わせていなかった、ということだが、一言で言えば、彼は二十歳の若さで死んでしまったという話である。実はここのバルカは死と切り離してとらえて「運命」と読んだ方が意味は通る。ここではアトロポスの性格も寿命の分配をするラケシスの性格も運を操るクロトーの性格も入り交じり、まさしく「運命」を意味するバルカになっており、カロンの方が強く死を意味している。しかしここではバルカとカロンのつながりは薄い。バルカの後にはすぐカロンが続くため、これまで見てきた例と同じように見えるが、バルカから死者（の魂）がカロンへ渡るという肝心の形式はここにはない。したがって、これまでに見てきた例

と同列に扱うことは出来ない。

ところで、ロンサールにはこの同じ Monsieur de l'Aubespine へ宛てたもう一つのエピタフがある。この作品が Pièces diverses attribuées à Ronsard. に収録されている由縁である。一人の詩人の手になる同じ人間に宛てた墓碑銘が2つ存在している理由は本稿の目的では無いが、実はこの中には死 *mort* とカロンが出現する場面がある。もちろんこの例は当初からカロンとバルカの共出現の例としては考えていなかったが、興味深い点もあるのでここで触れておく。この詩編では、Monsieur de l'Aubespine の死を嘆き悲しむニンフのドリアドが次のように語る⁽²⁵⁾。

Sourde, cruelle & malheureuse mort
 Qui m'as laissée en triste desconfort
 Pour le regret d'une si chere perte :
 Ainsi que luy que ne m'as-tu couverte
 D'un tombeau mesme, afin qu'en doux repos
 Ma cendre fust compagne de ses os,
 Et que Caron tous deux en un voyage
 Nous eust passez dessus l'autre rivage?

(Laum. t. 15, p. 296, v. 17-24.)

ここでは死とカロンは別物である。カロンは確かに三途の川を渡すという同じ行為をしてはいるのだが、ここでは死を象徴するものとしての性格は薄い。カロンは死の後の渡し守の役割しか果たしていない。さらにここにはバルカもいない。しかしこの一節の10行ばかり後には次のような一節がある。

Ah! fiere mort, alors que noz Printemps
 En leurs verdeurs florissoient plus contens,
 Luy en sa belle & premiere jouvence
 Moy en la fleur de l'age qui commence,
 Dure, felonnie au gros coeur inhumain,
 Tu as tranché d'une cruelle main
 (Dont seulement du souvenir je tremble)
 Le beau lien qui nous joignoit ensemble
 Et n'as vers luy si favorable esté

Que ses beaux ans vinnent en leur Esté.

(Laum. t. 15, p. 297, v. 37-46.)

バルカではないが、ここでは死 *mort* はバルカのアトロポスの性格を色濃く反映している。Tu as tranché d'une cruelle main... Le beau lien qui nous joignoit ensemble はまさしくアトロポスの行為そのものである。カロンと死 *mort* が出現する場所は10行ほどしか離れていない。死 *mort* がカロンへ死者（の魂）を渡すという流れがあったとしたら、この死 *mort* もバルカととらえるか否かは微妙な部分だが、ここにはそうした流れは無い。バルカと死 *mort* は一致しているが肝心の形式があるわけではない。

以上がバルカとカロンの共出現する例である。死 *mort* とバルカが一致する例は別として、最初に示した2例と併せて5例となるのだが、その全てが共通の形式を示していたわけではない。特に最後の墓碑銘に見られるケースは前の4例とは別なものであり、バルカとカロンが連続して出現しているが、そこにはバルカから死者（の魂）がカロンへ渡るという形式は無い。同じ形式を共有しているのは最初の4例だけである。

4. Du Bellay の場合

ここまでロンサールにおける例を見てきた。しかしここまで見てきた表現形式に源があるとすれば、この形式は他の詩人にも出てきている可能性がある。ここでロンサールを離れて Du Bellay に目を向けてみよう。Du Bellay ではバルカが単数(3)複数(2)と併せて15例、カロンが2例、小舟 (*barque, barcque*) が7例出ているが、小舟に関しては7例のうち5例がカロンの小舟となっており、しかもバルカと共出現している⁽²⁶⁾。以下にそのうちの一例を示そう。

Mercure des mains de la Parque
Prent notz umbres, & les conduyt
Au bord, ou la fatale barque
Nous passe en l'eternelle nuyt :

(Chamard, t. 3, p. 9, v. 17-20. *VERS LYRIQUES*, II)⁽²⁷⁾

これは DES MISERES ET FORTVNES HVMAINES AV SEIGNEVR IAN PROVST. のタイトルが付いたもので、上記の一節は、「ある者は生まれても我々を不幸にしているものに出会わずしてこの世に入りながらすぐに出てゆくのだ」というくだりの後に続く一節である。

ここではメルクリウスが死者の案内人としての役割を果たし、バルカから死者の魂を受け

とってカロンに引き渡す展開になっている。バルカが死者（の魂）をカロン（の小舟）へ渡すのではなく、間にメルクリウスが一枚噛んでいるのだ。そしてここにシャマル Chamard は注を付けており、死者の魂の案内役としてのメルクリウスに関しては Horace, *Carm.* I, X, 17-20. 及び I, XXIV, 15-18. からとされている⁽²⁸⁾。ところが Horace では、死者（の魂）の案内役としてメルクリウスが登場する場面は確かに存在するのだが、そこにはバルカはいない。Horace の典拠として指摘されている部分にはバルカからメルクリウスが死者の魂を受け取る部分は出てこないのである。

そしてカロンの小舟の部分に関しては Horace, *Carm.* II, III, 25-28. をあげているのだが、この部分はローモニエの示した典拠部分と同じで部分であり、さらに、おなじように Horace の一節 *nos in aeternum exsilium impositura cymbae* をあげている⁽²⁹⁾。しかしこの場面にはメルクリウスはいない。また、カロンの小舟 *la fatale barque* について見れば、この部分ではほとんど一致はない。ロンサールの問題の部分ではなぞったように Horace の痕跡が残っていたが、Du Bellay のこの部分にはその痕跡は無いに等しい。共通するといえば小舟をカロンの小舟として使用しているくらいしかない。Du Bellay にはバルカがカロン（の小舟）へロンサールの場合と同じように死者（の魂）を渡す使い方が他にも出てくる⁽³⁰⁾。しかしやはり、ロンサールの場合と同様に、Du Bellay でも上記の一例を除いては Horace への送りはついていないのである。ここでの注は、ローモニエでの場合と同じように、*la fatale barque* がカロンの小舟であることを示唆する注であると考えざるを得ない。

上記の例はロンサールと同じ展開をしているわけではない。上記の例ではバルカからカロンへという直接的な流れはなく、間に死者（の魂）の導き手としてのメルクリウスが入っていた。これはロンサールの場合と明らかに異なる。だが、Du Bellay が Horace から拾った細かい部品を創意で張り合わせることによってこの部分を成立させていることが良く判る。

それでは Du Bellay とロンサールの間の類似性はどの程度かという点、実際には二人の間の類似がまるで模倣のようになっている例が複数存在する。次の例ではほぼロンサールと同じ展開を認めることができる。

Trop & trop tost la Parque

T'envoira prisonnier

Dedans l'avare barque

Du vieillard nautonnier.

(Chamard, t. 4, p. 33, v. 129-132. *AULTRES OEUVRES POETIQUES*, I)

この中でバルカとカロンはロンサールの出現例と全くと言って良いほど語句も同じであ

り、果たす役割も同じである。つまり、ローモニエや Chamard では無視されていたが、ロンサールにも Du Bellay にも同じ表現が認められることによって、我々の注目した、バルカがカロンの小舟に死者（の魂）を渡すという2者連携の展開が形として確かに存在していることになるのだ。

そこでもう一步踏み込んでみると、バルカ、メルクリウス、カロンの3者連携の形とバルカ、カロンの2者連携の形との間にはどのような関係が推測されるのだろうか。3者連携の形の方が Horace からの張り合わせの痕跡が明瞭に残っており、Horace にまだ密着したまま離れていない印象を受ける。これに比較すれば2者連携の形はさらに一步離れた印象を受ける。より詩人の創意が入り込んで融合した印象を与えるのである。起源としては Horace だが、3者連携の形が間のメルクリウスを省く形で発展して2者連携の形に至ったと考えることが出来ないだろうか。そして、ロンサールにも Du Bellay にも、バルカがカロンの小舟に死者（の魂）を渡すという2者連携の展開が現れていることを念頭に置くと、ロンサールの例も Du Bellay の3者連携の形の延長上に位置づけられることになる。だが、この点に関してはまだ結論を出すことは適当ではない。本稿では2人の詩人に同じ表現が存在していることにより、バルカからカロンへという2者連携の表現が形式として確かに存在していることが確認されたという点でとどめておく。

5. 時間的な観点から

バルカからカロンへ死者（の魂）が渡るという形式は、執筆・出版年で考えると用例には共通の性格がある。せいぜい1553年程度までしか出てこないのである。ここでこれまでにあげた例の時間的な配置を見てみよう。

Du Bellay で見つかった5例のうち、最初の引用例 (Chamard, t. 3, p. 9, v. 17-20. *VERS LYRIQUES*, II) ともう1例 (Chamard, t. 3, p. 113, v. 97-102. *VERS LYRIQUES*, VII) は Chamard 版の全集第3巻に *VERS LYRIQUES* としてまとめられている。このことについて、Chamard は序 *Avertissement* の中で次のように述べている。

J'avais songé d'avord à donner en un seul volume toutes les poésies lyriques antérieures au voyage de Rome. Pour éviter l'inconvénient d'un trop gros fascicule, j'ai jugé préférable de les couper en deux. On ne trouvera donc ici que celles qui ont paru en 1549 : les Vers Lyriques et le Recueil de Poësie.

このことによりまず2例の年代が1549年以前のものであることが判る。

次の1例 (Chamard, t. 4, p. 33, v. 129-132. *AULTRES OEUVRES POETIQUES*, I) は A SALMON MACRIN SVR LA MORT DE SA GELONIS. のタイトルがついており、この詩編に関しても Salmon Macrin の妻の死に際して書かれたものであり、その死が1550年6月14日であることが判っている⁽³¹⁾。

もう1例 (Chamard, t. 5, p. 264, v. 7-12. *POÉSIES DIVERSES*, VI). はタイトルは HYMNE DE SANTÉ AV SEIGNEVR ROB. DE LA HAYE. となっており、この詩編の制作年代についても1553年の始め頃より以前と推測されている⁽³²⁾。

残りの一つ (Chamard, t. 4, p. 191, v. 25-28. *OEUVRES DE L'INVENTION DE L'AUTHEUR*, XIV) は Du Bellay が友人のラテン語のエレジーに沿った形で詩作を行ったもので、必ずしも Du Bellay の発想によるものだとは限らないが、この詩編も1552年以前のものであることが判っている⁽³³⁾。

一方ロンサルについて年代の割り出しは比較的容易である。ローモニエの注が付いていた出現例1 (Laum. t. 1, p. 225, v. 65-68.), それから出現例2 (Laum. t. 2, p. 139, v. 117-136.) はいずれも1550年に出版されたオード4部集に含まれている。特にロンサルの出現例1および2は出版年からみてバルカとカロン (の小舟) の2者連携の形が出現する最も早い例である。これに対して Du Bellay の3者連携の形を含む詩編は1549年以前なので、Du Bellay の方が早いかというそうは言い切れない。ロンサルの出現例1のタイトルにも名前が出ている Julien Peccate の名前が1549年の LES BACCHANALES. にコクレ学寮での同僚として出てくるためである⁽³⁴⁾。1549年の詩編にすでに同僚として登場しているのだから、親交は1549年以前から始まっていたことになる。だとすれば問題の引用例1は1549年以前にさかのぼる可能性があり、Du Bellay との時期の比較は行えなくなってしまうのである。これ以上制作年代を突き詰めることは難しい。しかし出版年との関係上、これらの詩編が1550年以前にかかれたものであることははっきりしている。

引用例の3 (Laum. t. 3, p. 18, v. 219-224.) を含む Ode de la paix. も1550年出版であり、そもそも主題となった条約が1550年なので、制作はほぼこの時期に特定される。引用例4 (Laum. t. 5, p. 212, v. 182-184.) は1552年12月7日をつかつた詩編だが、1553年の『オード集第5の書』の増補改訂版とと共に出ているので1553年以前の作品である。引用例5 (Laum. t. 18, p. 421, v. 9-15.) は簡単な説明しかない。ただし同じ人物へあてたもう一つの墓碑銘 (Laum. t. 15, p. 296, v. 17-24.) は1571年の総合作品集に収録されているし、当の本人の死亡が1570年だから時間的にはこの辺りに位置する。しかし最後のこの墓碑銘に関しては他の4例と異なるものなので、問題としているバルカからカロンへという形式はせいぜい1553年までの範囲に収まってしまう。

同じような使い方が、二人の詩人で、ほぼ同時期にのみ使用されている。この時間的な集

中も、バルカからカロン（の小舟）へという流れの背後に、一つの共通した背景があることを示しているように思う。

7. 結論

本稿では検索で得られた2つの表現 *m'envoie en la barque de perdurable exil* と *m'envoyez en la barque de l'avare nautonnier* を起点として考察を行っている。当該部分に付されたローモニエや Chamard による注は主に Horace との部分的な語句の一致の指摘にとどまるものであり、バルカが死者（の魂）をカロンへ渡すというバルカとカロン（の小舟）の2者連携という展開は注目されていなかった。しかし同じ展開を含んだ表現がロンサールのみではなく Du Bellay においても存在することを示し、この表現が一つの形式として明らかに存在していることを示した。また、この表現形式の使用時期が時間的にも一つのグループを形成している点を指摘した。

一方、Du Bellay には Horace からこの表現形式に至る中間に位置するようなバルカ、メルクリウス、カロン（の小舟）の3者連携の表現形式が存在しており、ここで取り上げた表現形式がやはり Horace 起源の表現形式ではあるものの、Du Bellay を経由して出てきた可能性があることも指摘している。

最後に「新続恋愛詩集」 *Nouvelle Continuation des Amours* のエレジーの一節についてふれておきたい⁽³⁵⁾。ここには、やはりバルカと小舟が出現する。だが、ここはこれまで挙げてきた部分とは全く異なる⁽³⁶⁾。したがって文字通りのバルカとカロン（の小舟）の共出現というわけではなく、上述の5例の中にも含めていない。だが、これまでに述べてきたことを念頭に置いて読むことによって、その受け止め方はかなり変わる。本稿が応用される例として指摘しておきたい。

Peult estre que ce livre un jour se formera
En vive renommée, & vollant semera
Tes honneurs par le Monde, & ceulx dont ton espose
Sa pudique maison divinement dispose,
Et ne voudra souffrir que la depite mort
Emporte avec le corps voz noms oultre le bord
Qu'on ne peult repasser, si ce n'est par la barque
Des vers, qui font outrage à la cruelle Parque.

(Laum. t. 7, p. 229, v. 71-78.)

死は肉体と名声を戻ってはこれないあちら側へと連れ去ってしまう。しかし「詩」という舟を使うのなら、話は別だという。「詩」はバルカへも抗する力があるのだという。ここでは死 *mort* そのものが出てきており、死は肉体も名声も連れ去り、二度と戻すことのないものとして描かれている。そしてここには小舟もバルカも出てきている。では小舟はカロンの小舟かということそうではない。小舟は「詩の小舟」であり、カロンの小舟ではない。詩の持つ力を強調する一場面なのである。

だが、これまでの経過を念頭に置けば、背景には明らかにカロンの小舟があることが理解できる。カロンの小舟は決して後戻りしない、一度渡した人間を連れ戻すことは無いのである。しかし、それとは異なり、「詩の小舟」は名声を世に伝えることにより、死を越えることができるのだ。さらにここでのバルカは個々の性格で言えばアトロ波斯だが、このアトロ波斯が表現しているのは死だけではない。逆らい難い運命、人智では動かし難い峻厳な運命の側面も含んでいる。だが、「詩の小舟」はそのバルカの力にさえも立ち向かうという。やはり結局は詩の持つ力を強調する一場面ではある。しかしその背景には先の引用で見たバルカとカロンの連携という表現形式が隠れていることが、今では疑いもなく明らかに見えるのである。

使用テキストおよび参考文献

本稿での使用テキストの記載は、ロンサールに関しては Laum. とし、Du Bellay に関しては Chamard として使用した全集を示し、その後に巻、ページ、行の順に記載している。

1. RONSARD, Pierre de, *Oeuvres Complètes*, éd. Laumonier, S. T. F. M., Librairie NIZET, 1937-1990.
2. Du. Bellay, Joachim, *Oeuvres Poétiques*, éd. Chamard, S. T. F. M., Librairie NIZET, 1931-1987.
3. Horace, *Odes et Épodes*, texte établi et traduit par F. VILLENEUVE, treizième tirage revu et corrigé par J. HELLEGOUARC'H, Belles Lettres, 1991.
4. OVIDE, *les Métamorphoses*, texte établi et traduit par Georges LAFAYE, sixième tirage, 3 vol., Belles Lettres, 1980.
5. OVIDE, *Les amours*, texte établi et traduit par HENRI BORNECQUES, Belles Lettres, 1930.
6. OVIDE, *L'art d'aimer*, texte établi et traduit par HENRI BORNECQUES, Belles Lettres, 1960.
7. HOMÈRE, *Iliade*, texte établi et traduit par Paul MAZON et autres, 3 vol., septième tirage rev. et corr., Belles Lettres, 1970.
8. HOMÈRE, *L'Odyssée*, texte établi et traduit par Victor BÉARD, 3 vol., huitième tirage, Belles Lettres, 1972.
9. VIRGILE, *Géorgiques*, texte établi et traduit par E. de SAINT-DENIS, septième tirage, Belles Lettres, 1982.
10. オウィディウス, 「変身物語」, 中村善也訳, 岩波書店, 1984.

11. ホメーロス, 『イーリアス』, 呉茂一訳, 岩波書店, 1978-79.
12. ホメーロス, 『オデュッセイアー』, 呉茂一訳, 岩波書店, 1979.
13. ホラティウス, 『歌章』, 藤井昇訳, 現代思潮社, 1973.
14. ウェルギリウス, 『アエネイス』, 泉井久之助訳, 岩波文庫, 1991.
15. CREORE, A.E., *A word-Index to the poetic works of Ronsard*, 2 vol., W. S. Maney and son LTD., Leeds England, 1972.
16. LAUMONIER, Paul, *Ronsard Poète lyrique*, Slatkine Reprints, Genève, 1972, réimpression de l'édition de la Librairie Hachette, Paris, 1932.
17. CAMERON, K., *Concordance de Du Bellay*, Droz, Genève, 1988.
18. 『ギリシア・ローマ神話辞典』, 高津春繁著, 岩波書店, 1978.

注

- (1) 本研究は平成13年度文部科学省科学研究費補助金を受けた研究「ロンサールの語彙構造」の成果の一端を利用したものである。
- (2) バルカは単数での呼称で、女神達として複数の場合はバルカエ又はバルカイ。
- (3) 又はステュックス河、いずれも冥界の河である。
- (4) タイトルは LE RAVISSEMENT DE CEPHALE DIVISÉ EN TROIS POSES.
- (5) Dans Ovide l'aurore enlève Céphale du vivant même de Procris, et, dédaignée de lui, le renvoie à sa femme en le menaçant. Ronsard conte l'aventure tout autrement : il suppose que l'enlèvement de Céphale est postérieur à la mort de Procris, et, suivant le plus ancien mythe, que l'Aurore l'a gardé près d'elle. P. Laumonier, *Ronsard poète lyrique*, p. 390, Slatkine Reprints, Genève, 1972.
- (6) Ovide a fait parler Procris expirante ; Ronsard au contraire a fait parler Céphale. Mais il a pris tel quel le détail, tristement voluptueux, du survivant qui reçoit sur ses lèvres le dernier souffle de l'être qu'il aime. P. Laumonier, *Ronsard poète lyrique*, p. 391, note 5, Slatkine Reprints, Genève, 1972.
- (7) () 内筆者。
- (8) 涙の描写 : Ovide, *Mét.*, IX, 656 ; *Ars Amat.*, III, 738 et suiv. 最後の吐息を集めて逃げ行く魂を留めておこうとする : Ovide, *Mét.*, VII, fin ; XII, 424 ; *Ars Amat.*, III, 738 et suiv.
- (9) *Carmina* は *Odes* のタイトルで Belles Lettres 版の Horace, *Odes et Épodes*. に収録されている (参考文献を参照)。ロンサルや Du Bellay の全集では *Carmina* で通してあるので、ここでも *Carmina* と記載している。了承されたい。ホラティウス, 『歌章』, 藤井昇訳, 現代思潮社, 1973, 第2巻, 第3歌。「こなたへ、酒を、香油を、美しき薔薇のあまりにもいのち短き花を、持って来るよう言いつけなされ、境遇と若さと三柱の姉妹神の黒い糸が許すあいだに一。…人みなのはては運勢の壺に振られ、遅かれ早かれ振り出されて、われらをば小舟に乗せ、はてまなき流刑へと連れてゆくのだ。」ちなみに exitura, impositura の両未来分詞の動作主は運命 sors であるから、この運命 sors にバルカを当てはめればロンサルと全く同じ展開になる。ロンサルがそう読んだ可能性も十分にあるのだが、ここでは一足飛びに両者を結びつける考えは避け、それでもなおこの表現形式が Horace へ結びつく点を考察している。
- (10) Laum. t. 1, p. 225, note 2.
- (11) 我々の覚え書きとしての意味も含めて、Horace の *Carmina* で可能性のある部分を示しておく。以下の参照は全て *Carmina* である。Parca: II, VI, 9 ; II, XVI, 39. cumba (cymba): II, III, 28. soror

: I, XXIV, 6 ; I, XXVI, 12 ; II, III, 15 ; II, IX, 16 ; III, III, LXIV ; III, XI, 40 ; III, XIV, 7 ; III, XIX, 17 ; IV, VII, 5. Portitor (渡し守). Caron (Charon) については出現例が見つからなかった。

(12) 死の不可逆性。

Nulle humaine priere
N'a repoussé derriere
Le bateau de Caron,
Quand l'ame nue arive
Vagabonde en la rive
De Styx, ou d'Acheron. (Laum. t. 2, p. 108, v. 7-12.)
他には Laum. t. 8, p. 205, v. 603-610.

(13) 死の公平性。

› Ne sçais tu qu'tout chaqu'un
› Le port d'enfer est commun,
› Et qu'une ame imperiale
› Aussi tost là bas devale
› Dans le bateau de Caron,
› Que l'ame d'un bucheron? (Laum. t. 7, p. 103, v. 5-10.)
他には Laum. t. 7, p. 190, v. 21-25 ; t. 13, p. 71-72, v. 203-213 ; v210, var. 67-78.

(14) Laum. t. 14, p. 114, v. 1-12. 人間的なカロン : Laum. t. 10, p. 125, v. 1-8 ; t. 18, p. 432, v. 4-12 ; t. 18, p. 438, v. 178-183.

(15) 冥界の描写の部品としてのカロン : Laum. t. 8, p. 93, v. 118-120 ; t. 8, p. 172, v. 198-201 ; t. 18, p. 126, v. 9-12.

(16) 死としてのカロン : Laum. t. 6, p. 10, v. 3-4 ; t. 6, p. 60, v. 72-76 ; t. 6, p. 219, v. 19-24 ; t. 8, p. 172, v. 183-185 ; t. 15, p. 89, v. 111-116 ; t. 15, p. 296, v. 17-24 ; t. 16, p. 126, v. 663-668 ; v665-668, var. 78-84 ; t. 18, p. 267, v. 39-46.

(17) カロンの小舟 : Laum. t. 1, p. 98, v. 135-144 ; t. 1, p. 225, v. 65-68 ; t. 2, p. 139, v. 121-124 ; t. 3, p. 18, v. 219-224 ; t. 4, p. 60, v. 5-8 ; t. 5, p. 212, v. 182-184 ; t. 14, p. 115, v. 1-12 ; t. 15, p. 84, v. 159-166 ; t. 15, p. 84, v. 159-166, var. 84-87 ; t. 15, p. 84, v. 159-166, var. 87 ; t. 18, p. 432, v. 4-12 ; t. 18, p. 438, v. 178-183.

(18) しかし、運命を分け与えるラケシスの性格付けは最も弱く、他の性格に吸収されてしまう場合が多い。

(19) ラケシス, 6 : Laum. t. 1, p. 205, v. 1-4 ; t. 3, p. 30, v. 414-420 ; t. 13, p. 61, v. 243-245 ; t. 13, p. 110, v. 683-684 ; t. 18, p. 150, v. 1-4 ; t. 18, p. 237, v. 73-74.

クロートー, 5 : Laum. t. 7, p. 46, v. 129-132 ; t. 13, p. 64, v. 23-26 ; t. 17, p. 39, v. 38-40 ; t. 17, p. 337, v. 9 ; t. 18, p. 290, v. 27-29.

アトロボス, 5 : Laum. t. 8, p. 252, v. 97-100 ; t. 8, p. 252, v. 97-100 ; t. 12, p. 221, v. 120-124 ; t. 17, p. 81, v. 357-358. voir la fin de la variante notée à la page 80. ; t. 18, p. 129, v. 24-28.

ラケシス+クロートー, 2 : Laum. t. 13, p. 107, v. 619-622 ; t. 18, p. 234-235, v. 1-6.

その他, 1 : Laum. t. 3, p. 153, v. 625-628.

(20) ラケシス, 2 : Laum. t. 4, p. 16, v. 13-14 ; var. 78 ; t. 18, p. 117, v. 7-9.

クロートー, 4 : Laum. t. 4, p. 16, v. 13-14 ; var. 84-87 ; t. 4, p. 108, v. 12-14 ; t. 4, p. 163, v. 12-14 ; var. 78-87 ; t. 10, p. 315, v. 1-8.

アトロボス, 48 : Laum. t. 1, p. 182, v. 49-56 ; t. 1, p. 225, v. 65-68 ; t. 2, p. 41, v. 10-14 ; t. 2, p. 139, v. 121-124 ; t. 3, p. 18, v. 219-224 ; t. 4, p. 54-55, v. 1-4 ; t. 5, p. 194, v. 33-36 ; t. 5, p. 212, v.

- 182-184 ; t. 5, p. 247, v. 77-79 ; t. 5, p. 253, v. 21-22 ; t. 5, p. 254-255, v. 43-48 ; t. 5, p. 257, v. 89-92 ; t. 6, p. 25, v. 13-14 ; t. 6, p. 104, v. 19-20 ; t. 6, p. 114, v. 26-28 ; t. 6, p. 224, v. 5-8 ; t. 7, p. 32, v. 137-140 ; t. 7, p. 229, v. 75-78 ; t. 7, p. 309, v. 29-32 ; t. 7, p. 311, v. 12-14 ; t. 10, p. 369-370, v. 123-130 ; t. 11, p. 6, v. 49-50 ; t. 12, p. 121, v. 268-272 ; t. 12, p. 222, v. 137-140. var. 78 ; t. 12, p. 267, v. 231-234 ; t. 13, p. 183, v. 29-32 ; t. 15, p. 161, v. 189-196 ; t. 15, p. 373, v. 27-30 ; t. 16, p. 226, v. 1153-1154 ; t. 17, p. 6, v. 67-72 ; t. 17, p. 67, v. 34-36 ; t. 17, p. 69, v. 85-87 ; t. 17, p. 71, v. 137-140 ; t. 17, p. 84, v. 451-452. var. 87 ; t. 17, p. 125, v. 9-11 ; t. 17, p. 134, v. 7-8 ; t. 17, p. 140, v. 147-148 ; t. 17, p. 255, v. 5-8 ; t. 17, p. 386, v. 11-12 ; t. 18, p. 14, v. 271-273 ; t. 18, p. 41, v. 115-116 ; t. 18, p. 137, v. 179-182 ; t. 18, p. 159, v. 37-39 ; t. 18, p. 159, v. 44-46 ; t. 18, p. 161, v. 10-12 ; t. 18, p. 292, v. 19 ; t. 18, p. 318, v. 77 ; t. 18, p. 421, v. 8-15.
- その他. 16 : Laum. t. 1, p. 112, v. 61-70 ; t. 5, p. 65, v. 45-46 ; t. 10, p. 98, v. 1-4 ; t. 12, p. 138, v. 273-274 ; t. 14, p. 110, v. 5-8 ; t. 14, p. 140, v. 135-139 ; t. 14, p. 164, v. 105-107 ; t. 16, p. 38, v. 180-183 ; t. 16, p. 146, v. 1031-1034 ; t. 16, p. 242, v. 1504-1509 ; t. 17, p. 81, v. 369-371 ; t. 17, p. 123, v. 1-2 ; t. 17, p. 134, v. 9-11 ; t. 17, p. 356, v. 12-14 ; t. 18, p. 58-59, v. 1-4 ; t. 18, p. 152, v. 51.
- ㉑ Caron (Charon), Parque, bateau の組み合わせでは Laum. t. 18, p. 421, v. 9-11. でダイレクトに一致する。
- ㉒ 長いタイトルである。HARANGUE QUE FIT MONSEIGNEUR LE DUC DE GUISE AUS SOUDARDS DE MES, LE JOUR QU'IL PENSOIT AVOIR L'ASSAUT, TRADUITE EN PARTIE DE TYRTÉE POÈTE GREC : & DEDIE A MON SEIGNEUR LE REVERENDIME CARDINAL DE LORRAINE SON FRERE.
- ㉓ Laum. t. 18, p. 421, note2. : Cette pièce a été publiée par Blanchemain, t. VII, p. 276-277.
- ㉔ カロンが渡し守の仕事をしているのはステュクス河であったりアーケロン河であったりする。
- ㉕ ドリアド Dryade はハマドリュアスのこと。木の精であるニンフ。ここでは Claude de l'Aubespine の妻を意味するとされる。この時には嘆いているこの妻 Marie Clutin も後には再婚してしまう。
- ㉖ Chamard, t. 3, p. 9, v. 17-20 ; p. 113, v. 97-102. *VERS LYRIQUES*, VII ; t. 4, p. 33, v. 129-132. *AULTRES OEUVRES POETIQUES*, I ; t. 5, p. 264, v. 7-12. *POÉSIES DIVERSES*, VI. 残りの一つは Du Bellay が友人のラテン語のエレジーに沿った形で詩作を行ったもので、必ずしも Du Bellay の発想によるものだとは限らない : Chamard, t. 4, p. 191, v. 25-28. *OEUVRES DE L'INVENTION DE L'AUTHEUR*, XIV.
- ㉗ Note de Chamard. : Cf. Horace, *Carm.* I, X, 17-20 ; I, XXIV, 15-18 ; II, III, 25-28 (nos in aeternum exsilium impositura cymbae).
- ㉘ Horace, *Carm.* I, X, 17-20, 「歌章」, 藤井 昇訳, 第1巻, 第10歌。「…おん身 (= メルクリウス)こそは、誠意ある魂を浄福の住居に安らわしめ、黄金の杖もて幽けきその群れを集めたまう、…」。
- Horace, *Carm.* I, XXIV, 15-18, 「歌章」, 藤井 昇訳, 第1巻, 第24歌。「…祈願にたいして命数の門を開こうとせぬ頑ななメルクリウスが、恐ろしい杖もて、幽魂の群れに一度迷おいやったうつろな幻影に、はたして生き血が戻ってようか。」
- ㉙ cumba (小舟) については cymba の異綴りがある。
- ㉚ Je bruloy' tous les jours apres,
Alors que les fievres cruelles
Mes oz vont ronger de si pres,
Qu'ilz n'ont quasi plus de mouëlles.
Ja-desja me montrait la Parque
De Charon la fatale barque. (Chamard, t. 3, p. 113, v. 97-102. *VERS LYRIQUES*, VII)

Ja te conduisoit la Parque
 Vers la barque
 De l'horrible Nautonnier.
 Et ja ton ame craintive
 Sur la rive

Luy presentoit son denier : (Chamard, t. 5, p. 264, v. 7-12. *POÉSIES DIVERSES*, VI)

- ⑧① Camard, t. 3, p. 27, note 1 : guillaume Boursault, femme du poète Salmon Macrin, qui l'a chantée sous le nom de Gélonis [...], était morte d'une pulmonie, à 40 ans, le 14 juin 1550.
- ⑧② Camard, t. 5, p. 264, note 1 : [...] Pour toutes ces raisons, je crois que l'Hymne de Santé dut être composé dans la seconde moitié de 1552, — plus tard, en tout cas, que le début de 1553.
- ⑧③ Camard, t. 5, IX, Avertissement : Les Œuvres de l'invention de l'auteur sont la seconde partie d'un recueil composite, dont la première est faite uniquement de traductions. Ce recueil, que le poète a mis au jour au début de 1552, et qui n'a pas, de son vivant, obtenu de réimpression, [...]. On trouvera dans ce volume, reconstitué selon sa teneur primitive, le recueil d'Inventions de 1552.
- ⑧④ Laum., t. 3, p. 189, v. 79 : Je voy derriere Peccate, [...]
- ⑧⑤ この例は1556年の『新続恋愛詩集』収録作品であるため、1556年以前の作品である。
- ⑧⑥ A JEAN DE MOREL, AMBRUNOIS, MARESCAL ORDINAIRE DES LOGIS DE LA ROYNE.

Charon et Parque chez Ronsard

— m'envoie (m'envoyez) en la barque de... —

Yoshito EMMI

La recherche par ordinateur portant sur les quatre premiers livres des Odes de Ronsard a découvert cette fois deux phrases semblables : « m'envoie en la barque de perdurable exil » et « m'envoyez en la barque de l'avare nautonnier ». Ces deux phrases, ayant les mêmes sujets Parque, les mêmes objets directs, les mêmes verbes et les mêmes compléments, suggèrent l'existence d'un cadre d'expression où la Parque, munie du caractère d'Atropos, fait passer les âmes des morts à Charon ou sur la barque (le bateau) de celui-ci.

Les passages développés suivant ce cadre apparaissent non seulement chez Ronsard, mais aussi chez Du Bellay. Cela signifie l'existence infaillible du cadre d'expression que notre recherche a mis en évidence et que les références de Laumonier et de Chamard ignorent. Ces deux chercheurs éminents font mention des accords avec des passages des *Carmina* de Horace, mais ils n'ont pas fait de remarques au sujet de l'existence de ce cadre d'expression là.

Ce cadre d'expression apparaît, chez ces deux poètes, uniquement dans les œuvres écrites avant l'an 1553. Cette particularité semble suggérer qu'il y ait une source commune aux deux, surtout quand Du Bellay donne un passage écrit où figure un modèle à trois personnages, Parque, Charon et Mercure le conducteur des morts. Ce passage de Du Bellay est évidemment un collage dont les éléments constitutifs sont puisés dans les *Carmina* de Horace et donc plus étroitement lié à Horace que les passages au modèle à deux personnages, Parque et Charon. Le cadre à deux personnages, plus constant chez ces deux poètes, peut être supposé plus évolué que le cadre à trois personnages.

Charon et Parque chez Ronsard
— m'envoie (m'envoyez) en la barque de... —

Yoshito EMMI

Études de Langue et Littérature Européennes
Université d'Okayama
N°21 (2002)